

編集後記

本年4月より、消化器外科学会雑誌の編集委員に加えて頂いた。毎月1回、東京九段下の事務局、編集委員長佐治重豊先生の元に嶋田紘担当理事とともに15人の編集委員、2人の編集幹事が集まる。夕方の6時より3時間近く、みっちりと論議し、また終電間に間に合うように会をすすめるのが、編集委員長の手腕でもある。遠くから来られている先生で最西は、新しく京都府立医大第一外科の教授になられた山岸久一教授、先生の最終便は21時18分発の「のぞみ」である。最東の私は21時32分発の「やまびこ」である。少し遅いが、多くの先生が最終便で戻られる。往復の時間を入れると9時間が費やされる。また、毎月クローネコヤマトの宅急便で送られてくる10編近い論文を前もって査読し、コメントをかき、編集会議に間に合うように戻すことが要求される。私の不得意の領域は医局員の手も借りて、批評してもらおう。東京近辺の先生はアクセスの時間こそ少ないが、査読にさかれる時間は相当であろう。会誌は、わが国で最も質の高い外科系邦文誌をめざす。どうして邦文誌である必要があるのか？ 質の高いとはなにか？ 自問自答するが答えがでない。これは若い人の登竜門となることを目的にしていると説明され納得する。箸にも棒にもかからないものはだめであるが、少しでもいい点を見つけ、いや、なくてもそれを引き出せるような視点から指導し、題の付け方、要旨の書き方、英文の書き方、図、表の作成の仕方など、全て指示して、掲載につなげる努力がなされている。誠に頭のさがる思いである。まさに、やっと入った新入医局員を、手取り、足取り指導しているのと同じ感覚をいただく。これほど時間とエネルギーを使っている編集会議が他にあるであろうか？ 新しい巻を手にとって、登竜門を目指す若き外科医よ、編集会議のエネルギーを吸収して、どうか立派な外科医に成長してくれればと思う。

(後藤満一)